

## 皮膚科: Dermatology

# ～筑波で皮膚を究める！～

### 皮膚科はサグラダファミリアだ！

皮膚には、アレルギーや自己免疫を含む炎症、腫瘍、先天的な代謝や構造の異常、感染症など多彩な病態が、皮膚だけではなく時には他臓器疾患に先がけてあらわれます。視診を中心として、病理標本を自分たちで見て、血液や画像検査など多彩な診断手技を駆使して診断します。治療も、内服、注射、外用、手術、レーザー、そしてなにより患者さんとのお話、と多岐にわたります。診療科それぞれにいろいろな特性がありますが、比較的少ない疾患を奥深く追求することが多い「スカイツリー」型診療科、カバーする範囲の広さが特長の「東京ドーム」型診療科と異なる、多彩なそれぞれを究め自分なりのタワーを築き続ける「サグラダファミリア」型、それが皮膚科です。

#### ★見るだけでわかる。しかしそれが奥深い…

皮膚科はその病変のほとんどを、格別の機器を用いることなく己の五感で感じることができます。しかしそれはただ見ているのではありません。特別にトレーニングされた洞察力は、その五感から得られる情報をさらに深みのあるものにし、非医療者はもちろん他科医師には決してまねできないような情報を引き出します。見るだけでどこまで診断し、補助検査をどう用いるか、という深みに尽きるところがありません。

#### ★皮膚を中心に人間のダイナミズムを感じる。

視診も肉眼だけでなく、ダーモスコープや光学顕微鏡も使います。採血や微生物培養検査、画像検査など一般的検査もよくおこないますが、さらに電子顕微鏡や生化学的、分子生物学的手法など様々な手法を用いて病態に迫ります。また、患者さんと向き合っ一緒に治療を進めてゆくことを起点として、家族、学校、職場、あるいは社会全体を相手にした活動まで広げることができます。このように、皮膚を見ることを出発点としてミクロとマクロの間をダイナミックに行き来できることは皮膚科のおもしろさのひとつです。悪性腫瘍、炎症性皮膚疾患、アレルギー、感染症、美容皮膚科など幅広い対象疾患に対し、薬剤、手術、レーザーなど多彩な治療手技を駆使して立ち向かってゆくことは奥深く、終わりを感ずることがありません。

### 筑波大学皮膚科の魅力

#### ★幅広い皮膚疾患に適切に対応できる皮膚科専門医になる

大学病院では皮膚悪性腫瘍、皮膚外科、膠原病、アレルギー性皮膚疾患、レーザー治療など各分野の指導医と豊富な症例がそろっています。関連病院の研修とあわせ、幅広い皮膚科研修が受けられ、高い総合力を持った皮膚科専門医になることができます。

#### ★興味を持ったサブスペシャリティーを追求することが出来る

興味を持った分野を普段からより深く追求することで、サブスペシャリティーを身につけることができます。与えられるのではなく自ら動くのであれば、そのための指導体制は備えられています。

#### ★キャリア形成支援に自信あり

定期的な面談や普段からの目配りにより、構成員のキャリア形成と茨城県の皮膚科医療向上が、ワーク・ライフ・バランスをとりながら達成できるように心を砕いています。20代の日本皮膚科学会会員は7割が女性です。産休育休の調整、時短常勤制度の活用、夫の勤務先の近くで勤務できる配慮などにより他大学から羨まれる充実した支援が行われています。

### 筑波大学皮膚科での研修

#### ★筑波大学初期研修医は、J1での選択がおすすめ

皮膚科に興味があるなら、J1の3ヶ月間を皮膚科で過ごすことをおすすめします。受持医としての病棟研修がメインで、それを通じて包帯法や創傷被覆材、外用薬の選択など小外傷治療の基本や欲遭遇する皮膚トラブル対処の基本が習得できます。希望により、先輩の非常勤先での外来診療見学を通じて一般的な皮膚科の様子を見学したり、実験室で研究の手伝いを経験したりすることもできます。皮膚科に進まなくとも大きな財産になるでしょう。その中で、諸先輩の話を聞きながら考えてください。

#### ★後期研修で独り立ちへの道を歩む

後期研修では、専門医取得が最初の節目になります。学会入会后5年間以上の研修歴、3本の論文、2回の講習会受講が必須で、これに論文、学会発表を積み重ねて専門医試験受験資格を得ます。多くの先輩が専門医を取得し、その合格率はほぼ100%です。

**後期研修1～3年目** 大学附属病院や基幹病院で基礎的な研修にあたります。このうち1～2年間は、大学で研修します。大学では受持医ないし副主治医として入院患者の診療にあたり、専門外来の補助などを通してサブスペシャリティーの概要を知ります。基幹病院では、外来診療に多くの時間をかけ、病棟でも受持医として診療にあたります。数多くの症例を経験してそこから学び取ることにより、大きく伸びる時期です。C1終了時には、発疹の記載や把握、診断や治療の概略を習得し、皮膚一般疾患でおおよその診療が出来るようになります。すなわち、独力で外来診療が行え、適切に上級医に相談できるようになります。

**後期研修4～6年目** 大学病院では副主治医として病棟の要になります。基幹病院では中堅として勤務します。一通りのことが出来るようになり、さらに発展的な内容に取り組むことでさらに伸びてゆく時期です。標準的には、後期研修6年目で専門医を取得します。初期研修期間中に皮膚科学会に入会していると、その分だけ早く専門医の受験資格を取得することが出来ます。研修する関連病院は茨城県内だけでなく、国立がん研究センター中央病院や虎の門病院など都内有名病院にもあり、先輩がスタッフとして勤務しています。

大学院に、希望あるいは教員の勧めで進学するのもこの頃です。Physician scientistとして研究を経験することは、人類の進歩に別の角度から貢献できるとともに、皮膚科医としての見目を養い臨床の力も大きく伸ばします。

**専門医取得後** 基幹病院での中堅、小規模病院での一人医長として勤務します。大学病院のクリニカルフェローとして勤務することもあります。その後は、さらに経験を積んで基幹病院の指導医や大学の教員になる者もいれば、開業する者もいます。子育てなどをしながら、時短常勤で勤務を続ける者もいます。しっかりとした皮膚科専門医としての技量があれば、その選択肢も様々です。

#### 皮膚をみることにおもしろさを感じる方の、参加をお待ちしています。

連絡先 皮膚科メール hf66tobu@md.tsukuba.ac.jp